



札幌部会(第16回)

日時:	2016年9月17日(土) 14:30-17:00
場所:	Sapporo55ビル 5階 キャリアバンクセミナールーム
参加者:	野間(同志社大)、濱地(道教大札幌校)、川瀬(札幌旭丘高)、吉川(千歳北陽高)、山下(札幌市立簾舞中)、竹内(日高町立日高中)、飯高(札幌市立東月寒中)、山崎(北見北斗高)[順不同]

【内容要旨】

- 野間先生より、「東京部会レポート」と「経済教室のチラシ」をもとに、夏の経済教室の報告が行われた。来年は10年目になるので、総括やシンポジウムなども検討してみたいとのことであった。併せて、来年1月28日に行う予定の冬の経済教室(札幌)の内容について検討が行われた。内容は発表枠を3つとし、①「河原先生による中学の実践報告」、②「企業から見た経済教育に関する講演」、③「エコノミストによる講義と、この内容を北海道の高校教師(山崎)が授業で活用するとしたらどうするか」という方向性で話し合いが進められた。そして、9月2日に行われたネットワーク理事会の報告があり、①「主権者教育において、もっと経済の視点を強化し、政策を比較・選択する能力を高めるような教育提案をすること」、②「GIS(地理情報システム)を用いた経済地理的な授業で地域データの読み取りなど経済の枠組みが一段と求められるようになること」、③「教育における学問的な厳密さと社会生活に適用する際のゆるやかさとのバランスをとること」という、大杉先生による今後の3つの示唆が紹介された。また、他地域の部会の報告も行われ、特に、山本先生(奈良学園高校)の「北海道研修旅行・十勝ファームステイ」の事前指導の資料(確認テスト及びワーク)から、六次産業化など、道外の先生の北海道に対する視点について研鑽を深める機会となった。
- 山下先生より、山下先生と兼間先生の発表資料をもとに、「夏の経済教室in東京中学」に参加された報告及び振り返りが行われた。今回の山下報告では、「高校入試問題の分析」で前回部会の議論となった「需要の変化(シフト)」、「需要量の変化(曲線上の変化)」の理解が大変であること、兼間報告では、札幌部会の先生方による「中学教科書の比較分析プロジェクト」を通して、実践者が単元構成からストーリーを創る意義を見出したことが重要なポイントとなっている。この2つの報告を結びつける篠原先生の補足として、「教科書の単元と単元をつなげる接続詞は、執筆者以外のところで決まっている。今の教科書にはストーリーがないため、入試に出るからと需要と需要量の関係にこだわるよりも、生徒に教える大事なものは何かを考えて授業をつくることの方が大切」という指摘があったことが紹介された。
- 竹内先生より、「家庭科における経済教育」の資料をもとに、家庭科の指導計画例(配当時間含む)と、教科書の紹介があり、実際に家庭科の授業で行った「価格の決め方」についての実践報告があった。竹内先生は、家庭科の教科書には、商品は品質や予算からみて適切かという視点しかないため、生徒にいかに関与と供給によって価格が成立するかをつかませられるかを問題としている。しかし、参加者からは、家庭科の教材から授業プリントを作ると、需給曲線における供給の内訳(原材料費、賃金、販売費用、利益など)の説明にしかないため、マルクス主義的な「労働価値説」に行き着き、人々の需要に基づく「効用価値説」的な理解ができないのではという指摘があった。このように、正味1時間という制約がある中で「価格の決め方」をど



のように理解させるかは、家庭科と社会科の経済教育の結びつきを考える上でも今後の大きな課題といえよう。

4. 飯高先生から、「知るぽると」の金融教育指定校として、11月4日に行う公開授業の内容と方法について相談があった。大まかな内容として、労働三法やワーク・ライフ・バランスに関連したことを行いたいとのことであった。参加者からは、講演者が大竹先生であることに関連させて、高校に行くのはソナトクかを時間割引率から考えさせる中学版「進学の経済学」の内容はどうかというアドバイスがあった。また、労働経済学などで用いるデータとして「賃金構造基本統計調査」(総務省)がよく使用されるということ、教師の思いだけを生徒に一方的に注入しても道德教育になってしまうので、河原先生がよく使うロールプレイを用いて考えさせる方法など、全国を結ぶ経済教育ネットワークらしい内容、方法に関するアドバイスがなされた。

(文責:北海道北見北斗高等学校 山崎 辰也)

次回開催予定:次回部会は、1月28日(土)に冬の経済教室を兼ねて実施。時間は13:00～17:00。場所は、Sapporo55ビル4階 北海道教育大学札幌駅前サテライト教室。